富士山麓の水田地帯を守る―昭和放水路

―静岡県富士市―

不二総合コンサルタント(株)　小長井　正　道

1．はじめに

昭和12年から18年にかけて，県営沼川沿岸排水幹線改良事業により整備された昭和放水路は，沼津市から富士市に向かって流れる一級河川沼川から駿河湾に放流するために建設された延長1,080 mの農業用排水路である。建設以来75年にわたり，富士山の麓に広がる水田地帯を守ってきた昭和放水路を紹介する。

2．放水路建設の歴史的背景

浮島ヶ原と呼ばれたこの地域は，富士市吉原から沼津市片浜付近に広がる平坦地であるが，低湿地で葦(あし)が生い茂った浮島沼とも呼ばれたところである。海岸線に並行して流れる沼川はきわめて緩やかな勾配のため，極度に排水が悪く，江戸時代この地域に新田開発された水田では，胸まで浸(つか)かって田植えをしても，ひとたび雨が続けば水泡に帰してしまい，五年一作，三年一作という状況であった。

この地域には，現在も大野新田，田中新田など10を超える○○新田と呼ばれる集落の地名が残っている。

江戸時代末期この地域に住んでいた増田平四郎（1807～1892年）は，この地域の百姓が世間並みの生活ができるよう耕地を増やそうと，沼地の水を海岸に排水する堀割を計画し，20年の歳月を掛けて，代官所や勘定奉行に18回に及ぶ訴願をして，60歳で許可を得て，延長505 m，幅7.3 mの堀割水路を2年半の工期と7,809両という巨額を投じて，明治2（1869）年春に完成させた。

しかし無情にもその年の8月，高波に襲われて大半が破壊埋没してしまった。

奇しくも，この同じ場所に現在の昭和放水路が建設されることになるのである（**図-1**）。

3．昭和放水路の建設

増田平四郎の建設した放水路が高波で瓦解した年の30年後の明治32（1899）年にも大津波が来襲し，沼川本川の河口が閉塞して大きな被害が発生した。その後も毎年のように湛水被害が発生し，三年一作の状態が続いたため，大正期に入り，この浮島ヶ原の排水対策のため，東京帝国大学の横山又次郎博士，上野英三郎博士などによる本格的な科学的調査が行われた。この横山博士の報告をベースに昭和8年3月，この地域の念願であった県営沼川沿岸排水幹線改良事業が着工となった。

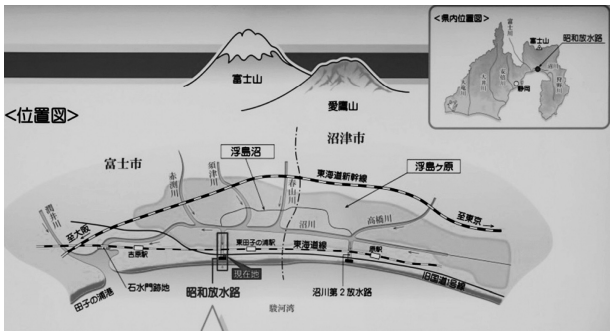

図-1　昭和放水路位置図

この事業の目玉となった昭和放水路は，沼川本川より導水路を分岐開削し（**写真-1**），海岸の砂丘部には暗渠を埋設し，海岸汀線後方の砂浜に排水口を設けて，沼川流域の洪水量の大半（最大通水能力は69.5 m^3/s）を排除するよう計画され，昭和12年2月に着工した。

直後に日中戦争が発生し太平洋戦争に突入したため，人材やセメントなどの資材の調達に困難を極めたが，なんとか昭和18年に完成し，浮島ヶ原の湛水被害の軽減と食糧の増産が図られた。

写真-1　昭和放水路分岐地点

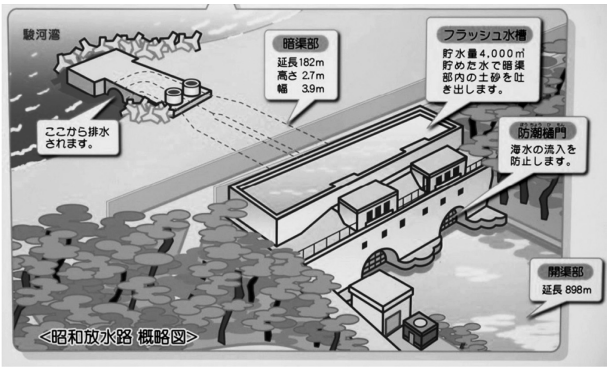

図-2　海岸暗渠部の概要図

（写真提供：静岡県富士農林事務所）

写真-2　海岸暗渠部から富士を望む

（写真提供：静岡県富士農林事務所）

写真-3　昭和放水路防潮樋門

4．戦後の改修工事

昭和放水路の完成を受け，戦後の沼川流域の排水改良事業が進められ，昭和40年には，沼川上流部に昭和第2放水路が建設された。

放水路の課題は，排水口付近の滞砂・閉塞であり，昭和放水路も昭和45年から湛水防除事業により，海岸暗渠上部に堆砂をフラッシュ排除するための約4,000 t の水槽を設置した。

写真-4　現在の浮島ヶ原の水田状況（写真上が駿河湾）

写真-5　浮島ヶ原より富士を望む

また，平成に入り，波浪により老朽化した暗渠先端部の改修に合わせ，排水口を東側に90度曲げて堆砂しにくい構造に改修した（**図-2**，**写真-2**，**3**）。

また，沼川本川に沿った地域では，県営ほ場整備事業や湛水防除事業が次々と展開され，浮島ヶ原は静岡県東部地域でも有数の水田地帯に変貌を遂げた（**写真-4**，**5**）。

5．おわりに

昭和の時代の農業土木の勢いを彷彿とさせる当時作られた「昭和放水路の歌」の1番を紹介して，筆を置きたい。

見たか浮島排水を
農業土木の精をこめて
築きあげたる放水路
沼の悪水引きうけた
出るなら出てみろ大水よ
グングン吐かせるドット出すぞ

引用文献

1）静岡県富士農林事務所：浮島ヶ原の土地改良の歴史－昭和放水路の改修にあたって－（1992）
2）静岡県土地改良史編さん委員会：静岡県土地改良史（1999）